

都・建設予定地 生活記 (4)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕の生活記。

失ってから、失ったものの大切さに気づく、とはありふれた言葉だ。小説でもテレビドラマでも映画でも、ひょっとしたら現実でも、いろんな人がこの言葉を引用している。それだけ使われるのはそこに真実があるからだろう。実際に、そういうことはある。やっぱり失ってから「大切だった」「僕には必要だった」と思うことはあるものだ。今回はその話。恋の話？ いや、酒の話だ。

「働いて欲しいのはグジャラートです」とはじめて言われた時、僕が思い浮かべたのはふたつのことだ。ベジタリアンの州ということ、それから禁酒州だということ。そのうち僕が気にしたのは「ベジ」の方だ。デリーに留学していた時は、ピュアベジの大家さんと一緒に暮らしていたので、肉抜き生活がそれなりに堪えることを知っていた。時々病に伏せながら「これ、血が足りていないやつだ。肉だ。体が肉を求めている」と思う瞬間があることを知っていたのだ。禁酒の方は、あまり気に留めなかった。お酒は好きだが、毎日飲んでいただけではないし、そこまで強いわけでもない。大学生活中に、ちょっとくらいは強くなったかもしれないけれど、一人で飲むほどではない。なければいいと思った。

禁酒州と言っても、まったく酒がないわけではない。リカーパーミットを取得し、どこかのホテルに行けば、一定量まで買うことが出来る。とは言え、僕はここ最近までインドでお酒を飲める年齢に達していなかったからパーミットも持っていなかった。日常生活でお酒に触れる機会はそうそうない。酷暑の中、ビールが飲みたいと思っても、ここにビールはない。とりあえず代わりに炭酸水でも飲むのだけれど、それが何の代わりになっているのかよく分からない。ようやく分かった。酒は大事だ。「買わない」と「買えない」は違うのだ。でも僕がお酒を手にするのは、日本人同士の懇親会にお呼ばれた時くらいだ。

あの日は久々の懇親会だった。アルコールを口に含んだのもいつ以来だっただろう。一口飲む。美味しい。アル中ではないが足りなかったものが体に入ってきた感じがする。普段飲めないこともあって、ずっと美味しく感じる。酒が進む。そもそも酒に強くもないし、大学生活で手に入れたちょっとばかりの強さもグジャラート生活に上書きされてしまっている。でも飲む。飲み溜めだ。そして吐いて、記憶と一緒に気も失った。

目が覚めて、人の家のベッドで、パンツ一丁で寝ていた自分に気付いた僕は、明らかに色々失っていた。失って気づいたことは、酒は敵だということ。二度と酒は手に取らん、と思った。禁酒州だ。それくらいは簡単な事だろう……。

という決意が昨年のこと。年も変わり、酒の飲める年齢になった。その間に日本人会も立ち上がり、懇親会もあった。お酒のある懇親会だ。決意はともかく、禁酒州でも、まあその、なんだ、僕は楽しくやっている。

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。